大黃之研究

御影 雅幸、吉田 愛
日本金澤大學

摘　要

現今大黃之根莖通常被利用爲瀉下藥，在古代它是否被利用爲瀉下藥，或是去瘀血藥（身體內之淨化劑，尤其可淨化凝滯之血液），頗值得進行探究；此外，現今市面上販賣之大黃產品，是否即其最重要之藥用部位，更值得進行深入探討。

研究結果顯示，大黃之根莖在古代主要被利用爲去瘀血藥，以淨化凝滯之血液，雖然有時也被用爲瀉下藥或其他用途。直到清朝，主要大黃之物種包括 *R. palmatum* L.之根莖才被確認爲品質最佳之去瘀血大黃生藥產品，大黃之根則被利用爲瀉下藥。

除了瀉下特性之外，大黃之藥效廣泛，這些藥效以及其最重要藥用部位爲何，都值得繼續進行深入探討。

漢薬「大黄」は，現在中国では正品大黄としてタデ科のダイオウ属植物3分類群，*Rheum palmatum* L., *R. tanguticum* Maxim. ex Balf., *R. officinale* Baill. の根茎及び根を規定し[1)]，わが国ではさらに *R. coreanum* Nakai をも原植物[2a)]としている。これらはすべて同属植物の中では大型の根茎を有する種である。

大黄は近年一般に瀉下薬（攻下薬）に分類され[3)]，本草考証学的にも松岡[4)]は緩下，健胃薬であると評価し，またこれまでに瀉下活性成分やその作用発現機構も明らかにされている[5)]。このように大黄には確かに瀉下作用があるが，古来駆瘀血薬としても使用されてきたことから[1)]，大黄の本来の薬効が果たして瀉下薬であるのか駆瘀血薬

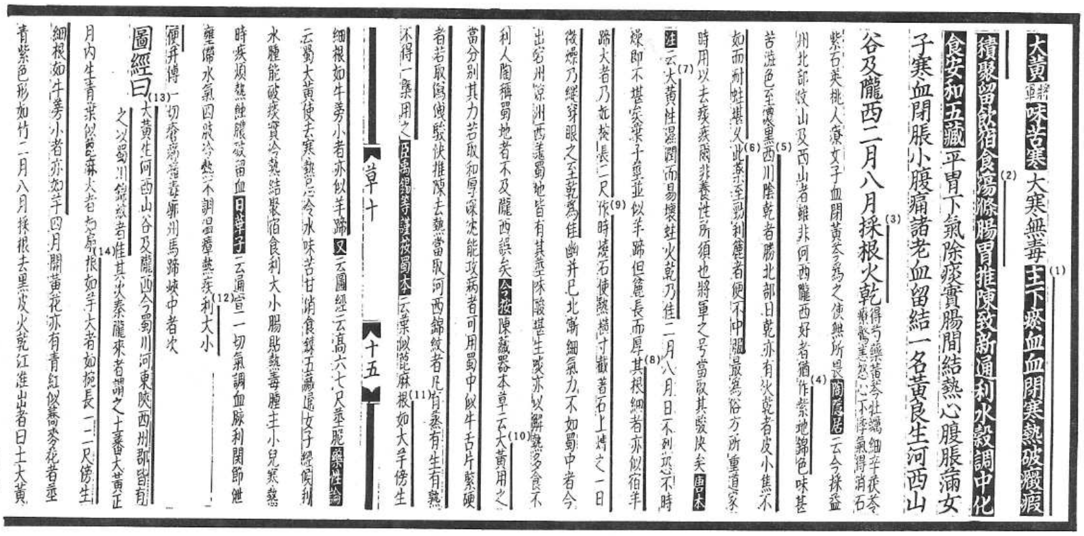

大黄將軍味苦寒大寒無毒主下瘀血血閉寒熱破癥瘕
積聚留飲宿食蕩滌腸胃推陳致新通利水穀調中化
食安和五藏平胃下氣除痰實腸間結熱心腹脹滿女
子寒血閉脹小腹痛諸老血留結一名黄良生河西山
谷及隴西二月八月採根火乾得芍藥黄芩牡蠣細辛茯苓療驚恚怒心下悸氣得消石
紫石英桃人療女子血閉黄芩爲之使無所畏陶隱居云今採益
州北部汶山及西山者雖非河西隴西好者猶作紫地錦色味甚
苦澀色至濃黒西川陰乾者勝北部日乾亦有火乾者皮小焦不
如而耐蛀堪久此藥至勁利麤者便不中服最爲俗方所重道家
時用以去痰疾非養性所須也將軍之号當取其駿快矣唐本
注云大黄性濕潤而易壞蛀火乾乃佳二月八月日不烈恐不時
燥即不堪矣葉子莖並似羊蹄但麤長而厚其根細者亦似宿羊
蹄大者乃如椀長二尺作時燒石使熱横寸截著石上煿之一日
微燥乃縄穿眼之至乾爲佳幽并已北漸細氣力不如蜀中者今
出宕州涼州西羌蜀地皆有其莖味酸堪生噉亦以解熱多食不
利人陶稱蜀地者不及隴西誤矣今按陳藏器本草云大黄用之
當分別其力若取和厚深沈能攻病者可用蜀中似牛舌片緊硬
者若取瀉泄駿快推陳去熱當取河西錦紋者凡有蒸有生有熟
不得一槩用之臣禹錫等謹按蜀本云葉似蓖麻根如大芋傍生
細根如牛蒡小者亦似羊蹄又云圖經云高六七尺莖脆藥性論
草十　十五
云蜀大黄使去寒熱忌冷水味苦甘消食錬五藏通女子經候利
水腫能破痰實冷熱結聚宿食利大小腸貼熱毒腫主小兒寒熱
時疾煩熱蝕膿破留血日華子云通宣一切氣調血脉利関節泄
壅滯水氣四肢冷熱不調温瘴熱疾利大小
便并傅一切瘡癤癰毒廓州馬蹄峡中者次
圖經曰大黄生河西山谷及隴西今蜀川河東陝西州郡皆有
之以蜀川錦紋者佳其次秦隴來者謂之土蕃大黄正
月内生青葉似蓖麻大者如扇根如芋大者如椀長一二尺傍生
細根如牛蒡小者亦如芋四月開黄花亦有青紅似蕎麦花者莖
青紫色形如竹二月八月採根去黒皮火乾江淮出者曰土大黄
（後略）

図 1　『大観本草』中の大黄の記文

であるのかがしばしば論議の的となり，最近では播磨ら[6)]がカラゲニン浮腫，エンドトキシン誘発血栓症に対する改善作用を指標に動物実験により大黄の駆瘀血作用を検討しているが，未だ明確な結論は得られていない。加えて，近年，薬用部位に混乱が見られ，以前は根茎のみが正品とされていたが，中国では『中華人民共和国薬典・1977年版』[1b)]以降，日本では『第十改正日本薬局方』(1981年)[2b)]以降，根茎とともに根も使用できるように変更された。しかし根が使用され始めた時期や原因については不明で，またその是非も不明である。

大黄の本草考証学的研究は松岡[4)]の薬効についての簡単な報告があるのみで，薬用部位に言及した研究は未だない。そこで，本研究では以上の問題点を解決する目的で古文献をひもとき，大黄の薬効ならびに薬用部位について史的考察を行った。

1.　薬用部位に関する考証

1）形状からの判断

ダイオウ属の地下部は，正品大黄の原植物では大型でやや縦に長い円筒形の根茎とそれから出る太い根とからなる。一方，非正品大黄では *R. undulatum* のように大型の根茎を有するものもあるが，一般には *R. australe* (=*R. emodi*) のように，正品大黄の原植物と比較すると根茎部は小さくて不明瞭なものが多い[7)]。

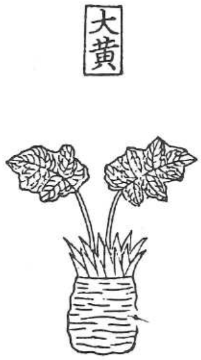
大黄の薬用部位に関する記載は，『名医別録』[8)]が最も古く，「採根」とある（**図 1**―傍線部 3；以下同様）。しかし，薬用部位が根である「人参」「桔梗」，また根茎あるいは塊根である「升麻」「知母」「沢瀉」「半夏」など，地下部由来の生薬は同書ではすべて「採根」と記されていることから，この時代にはまだ根と根茎を区別する概念が

なかったと判断される。

一方，大黄の形状に関しては『新修本草』[9]に「大きな者は椀の如くで長さが二尺となる」（図1—8），『蜀本草』[9]に「根は大きな芋の如くで，傍らに生じる細い根は牛蒡の如くで，小さな者は亦羊蹄のようだ」（図1—11），『図経本草』[9]に「根は芋の如くで大きな者は椀の如くで長さ一～二尺，傍らに生ずる細い根は牛蒡の如くだ」（図1—14）と記された。芋はサトイモのことであるから，その形状と大きさから大型ダイオウ属植物の根茎部を指したものと判断できる。なお『蜀本草』や『図経本草』にある「傍らに生じる牛蒡の如き細い根」が真の根を指しているものと考えられるが，これらは単に地下部の形態を解説した文章で，各種本草書の附図を見る限り根は正品としては利用されていなかったものと判断される。すな

『大観本草』

『政和本草』



『紹興本草』

『本草品彙精要』

『三才圖會』

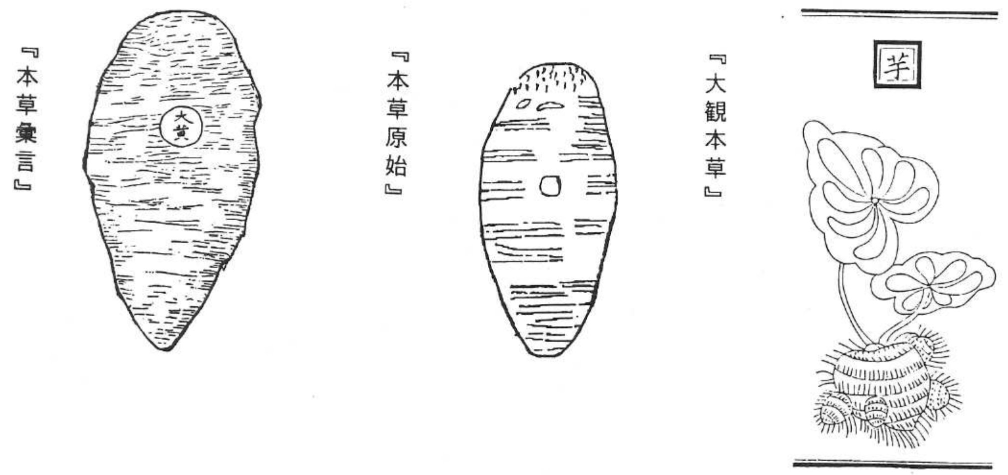


図2　各種本草書にみられる大黄の附図

わち，宋代の『図経本草』，明代の『本草品彙精要』[10]，『三才圖會』[11]など歴代本草書に掲載された「大黄」の附図はすべて芋あるいは椀のような形に横縞が描かれたものであり，根は描かれていない（**図2**）。横縞についても根茎に特徴的な葉痕であると判断され，根には存在しないことからも根茎のみが描かれていることは明確である。さらに薬用部位のみを描いた明代の『本草彙言』[12]や『本草原始』[13]にも横縞の描かれた大黄の図があり（図2），これらも明らかに根茎を加工したものである。

以上，各種文献中の形状に関する記載内容から，正品大黄の古来の薬用部位は根茎であったと考証した。

2）錦紋について

ダイオウ属植物は植物形態学的に根茎と根の間にはっきりとした境目がないため，外見で根茎部と根部を明確に区別することが困難である。それらを如何にして区別したかについては古来良質品大黄の特徴とされてきた「錦紋」の解釈が重要である。すなわち，錦紋は中国産ダイオウ属の中では正品大黄の原植物3種の根茎にのみ明瞭に認められるからであり[7,14]，この錦紋の有無によって根茎と根を区別していたと判断できる。

本草書中の「錦紋」についてまとめると次のようである。陶弘景は『神農本草経集注』[8]の中で「作紫地錦色」（図1—4）と記し，これは錦紋を説明したものと解釈できる。錦紋の用語が初見されるのは『本草拾遺』[9]である（図1—10）。その後『図経本草』で「(大黄の産地は種々あるが)とくに蜀川（今の四川省）産で錦紋のものが良質品である」と記され（図1—13），以後，明代の『本草蒙筌』[15]に「必得重實錦紋」，清代の『本草備用』[16]『本草従新』[17]『本草求真』[18]にそれぞれ「川産錦紋者佳」とあることから，現代に至るまで錦紋が良質品大黄の指標として使用されてきたこと，すなわち先述した大型種の根茎が正品として使用されてきたことが知られる。

このように良質品大黄の指標として「錦紋」の用語が存在したことは，それとは区別するべき「錦紋がない大黄」も存在していたことを意味し，同一原植物の根に由来する品質の劣る大黄もあったと考察できる。このことから，根と根茎に

表1　『神農本草経』にみられる代表的な駆瘀血薬に関する記載（抜粋）

生薬名	効　能
桃　仁	主瘀血血閉
牡　丹	除癥堅瘀血
川　芎	婦人血閉
虻　虫	主逐瘀血破下血積堅痞癥瘕
水　蛭	主逐悪血瘀血月閉破血瘕積聚
䗪　虫	血積癥瘕破堅下血閉

は薬効に歴然とした違いのあることが推察されるが，具体的なことは本草書には記載がない。

以上，各時代における本草書の中で，「錦紋」の用語は「正品大黄原植物の根茎」を指す代名詞として使用されてきたことが窺え，「錦紋」に相当しないものの中に正品大黄原植物の根に由来するもの，また非正品大黄原植物の地下部が含まれていたものと考えられる。なお，*R. undulatum* をはじめとする根茎が大型になる他種は中国には分布せず，また *R. undulatum* には錦紋はない[19]。

2. 薬効に関する考証

1）漢代における記載について

大黄は『神農本草経』[8] の下品に初収載された。同書における「大黄」の薬効に関する記文（図1―1）に見られる「下瘀血血閉」は明らかに駆瘀血薬としての効能を述べたものである。「瘀血」あるいは「血閉」の用語は同書収載の牡丹皮，虻虫などを始めとする他の駆瘀血薬にも見られ（**表1**），大黄の第一義の薬効が駆瘀血であったことに疑念はない。一方，それに続く「破…留飲宿食。蕩浄腸胃…通利水穀」（図1―2）は大黄の瀉下薬としての効能を示しているようであるが，類似の薬効は「蕘花」に見られ「蕩浄腸胃中留癖飲食…利水道」とあり，「瘀血」「血閉」の用語がない点を除けば大黄とほぼ同効が記されている。しかし，蕘花は「水飲を排し積聚を去る」要薬であり，瀉下薬としての評価はなく[20]，これらの記載内容が即ち瀉下作用を意味するものとは断定できない。一方，瀉下薬として著名な「芒硝」は『名医別録』[8] 収載品で，「利大小便」と記されている。この「利大小便」の用語は莧実，百合，防已などに見られるが，これらの生薬の性質を考慮すると「利大小便」も強い瀉下作用を意味するものでないことは明白である。「破…留飲宿食。蕩浄腸胃…通利水穀」と「利大小便」の作用の違いは不明確であるが，宋代になって『日華子諸家本草』[9] で初めて大黄にも「利大小便」（図1―12）と記されたことから判断すると，現在は大黄，芒硝ともに同じ瀉下薬として扱われているが，当初は作用がかなり異なったものと認識されていたことが窺える。なお芒硝や，『神農本草経』収載品で芒硝と同類生薬の消石や朴消に「瘀血」の字が記されていないことから，瀉下作用と駆瘀血作用には相関性がないことが知られる。

以上，大黄の漢代における第一義の薬効が駆瘀血であったことは明確であるが，瀉下薬としても利用されていたか否かは本草書の記載内容からは不明である。そこで医方書である『傷寒論』『金匱要略』をひもとき，大黄配合処方の薬効を検討すると，『傷寒論』では承気湯類（大承気湯，小承気湯，調胃承気湯），『金匱要略』では麻子仁丸が瀉下薬として使用されている[21]。各処方中では大黄と芒硝がともに配合されていたり，また芒硝がない場合や瀉下作用を有する他の生薬と配合される場合もあるが，いずれにせよ裏の実熱による大便秘結を緩解するのに用いられている。一方，桃核承気湯，抵当湯，下瘀血湯などの例に見られるように大黄は駆瘀血薬中にも配合される。このことに関しては，吉益東洞[22]が張仲景の大黄の使用法について数種の処方をあげて歴観している。要約すると，「張仲景は大黄の主たる効能を，特に毒を利する作用であるとしている。故に各処方中では主薬の薬効にしたがい，よって大黄のみが単用されることがない。例えば，黄連と合することにより心下痞を治し，水蛭・虻虫・桃仁と合することにより瘀血を治し，芒硝と合することにより堅塊を治し，甘草と合することにより急迫症状を治す……」とし，多様な大黄の効能を解説し，解毒以外には薬効を特定していない。

以上，大黄は医方書の中では種々の薬効を期待して利用されており，その中で瀉下薬としても使用されてきたと理解するのが適切であろう。

2）大黄の産地・加工と薬効に関する記載

大黄原植物の採集後の加工調製に関して，『名医別録』[8] には「火乾」（図1―3），『神農本草経集注』[8] には「四川省西部産の陰乾したものは北部の日乾したものに勝る…火で乾燥したものもあり，皮が少し焦げて異なり，久しく保存に耐える」（図1―5），『新修本草』[9] には「大黄の性は湿潤で壊れ易く虫に喰われ易い。火で乾燥したも

のが佳い…作る時には石を焼いて熱しめ，横に寸截して石の上に置き一日強く熱する。微かに乾燥したら穴を穿ちて縄を通して干して乾燥したものを佳とする」（図１—７，９）とあり，古来加熱加工が行われてきたほか，自然乾燥品もあったことが窺える。また加熱目的については上記の『新修本草』の記文や，『本草拾遺』[9]に「凡そ之を用いるには蒸す場合，そのまま乾燥させる場合，熱する場合などが有り，一定の方法はない」「図１—10）とあることから，虫害の忌避と同時に薬性の変化をも目的としていたことが窺える。時代が下り，金代になって『湯液本草』[23]に『大黄須煨，恐寒則損胃気」と，加熱加工は副作用軽減のために不可欠であることが明記された。なお「煨」は乾燥したものを再び湿らせて加熱する方法である点で新鮮品を加熱する方法とは異なる。炮製と薬効に関しては別報で述べる。

薬効に関して，陶弘景は「此の薬は至って薬効が鋭く，脆い者はすなわち服するにあたわず」（図１—６）と記した。「勁利」は一般に「薬効が鋭い」と訳されるが，本文の場合には「利する作用が強い」とも解することができ，脆いものは利する作用が強いがために敬遠されていたことが窺える。唐代になると『本草拾遺』（図１—10）に「若し和厚深沈し能く病を攻める者を取るなら蜀中の牛舌片に似て緊って硬い者を用ゆべし，若し瀉洩駿快し陳きを推し熱を去るを取るならば当に河西の錦紋の者を取るべし」と，薬効の異なる２種類の大黄について記載された。前者は「似牛舌片」の一文から『新修本草』に記された「横に寸截した後に焼石の上で加熱したもの」に一致するものであり，また「緊硬」の字義から硬い品質であったことが窺える。後者については，「瀉洩駿快」が瀉下作用であると判断できるので，強い瀉下作用があったことが判り，さらに陶弘景が「脆い大黄は利する作用が強い」としていることから，このものが脆い品質の大黄であったと考証できる。なお，この脆い品質の大黄は『本草蒙筌』[15]に「必得重實錦紋勿用輕松朽黒（松：中がすけているの意)」と記載されたように，明代に至っても敬遠されていた。

以上，古来大黄には硬いものと脆いものの２種があり，これらは現在重質系大黄，軽質系大黄と分別されているもの[19]に相当するものと考えられる。２種の大黄は薬効にも違いがあり，古来脆い大黄（軽質系大黄）は瀉下作用が強いために敬遠されてきた。なお，『新修本草』中の加熱処理したものと『本草拾遺』中の「似牛舌片緊硬者」が一致すると考えられることから，重質系大黄とは加熱処理されたものであると判断される。

３）わが国における大黄

大黄は正倉院薬物として知られるごとく，わが国へも古くに伝えられ薬用に供されてきた。現在に伝えられる正倉院の大黄はすべて重質系であり[24]，松岡[4]も推察しているように当時中国（唐代）では重質系大黄が賞用されていたことが窺える。一方，わが国では雅黄（軽質系大黄）が賞用されてきたことは周知のことで，先の考察結果から，このことはわが国では大黄は瀉下薬として評価されてきたことを意味する。実際，曲直瀬道三[25]は大黄について「傷寒七八日ニ及ブニ悪寒トドマリ発熱有テ大便通ゼザルニハ必ス用ユ」と下剤としての効能を明記し，さらに『古方薬品考』[26]（1842）では「紅毛（オランダ）大黄有リ。形漢産ニ似テ色黄黒又用ユ可シ」と，下剤として利用されてきたヨーロッパ産の大黄も同様に利用できるとしていることから，わが国では大黄を瀉下薬として利用してきたことは明確であり，軽質系大黄が賞用されてきた所以であると判断される。

結論および考察

1.　大黄の古来の薬用部位は根茎であり，少なくとも清代までは正品大黄３種の原植物すなわち，すでに報告[7]した中国に分布し現在も利用されている *Rheum palmatum*, *R. tanguticum*, *R. officinale* の根茎が良質品であると評価され，正品として使用されてきた。

根茎に由来する良質品の大黄とともに，根に由来する劣品の大黄も同時に存在していたと推察されるが，清代までの書物には根を使用する記載は

皆無であることから，中国で大黄の基源として根に由来するものが公式に利用されるようになったのはつい最近のことと考えられる。根も利用されるようになった理由として資源植物の減少もあげられようが，瀉下活性成分は根にも含まれている[27]ことから，近年の西洋医学的評価を受けて大黄を瀉下薬として認識した結果であろうと考察する。

このように，大黄を瀉下薬であると評価するならKroeber[27]が指摘したように根も利用可能である。しかし，本研究で明らかにしたように，中国医学では古来ダイオウ属の根茎を「錦紋」を利用して根とは明確に区別して利用してきた。このことは大黄の薬効が瀉下作用のみを期待したものではなかったことを示唆しており，今後根茎と根の作用の違いや非正品大黄との違いについて詳細に検討する必要があろう。

2. 中国医学における大黄の初期の主たる効能は駆瘀血であったが，瀉下を始めとする他の効能でも使用されていた。

吉益東洞[22]は，大黄の働きは処方中の主薬の薬効に従って変化するため，組み合わせの違いにより種々の薬効を発現すると解釈している。このことは大黄が駆瘀血や瀉下のみならず，胸腹満，心下痞，急迫症状などの緩和，また治水などの薬効を有することをよく説明しており，大黄を瀉下薬としてのみ評価研究することは大黄の薬効の本質を見失うことになろう。

3. 唐代にはすでに重質系大黄と軽質系大黄の薬効の違いによる使い分けがなされ，後者の方が瀉下活性が強いと認識されていた。

本研究で重質系大黄は加熱処理品であると考証され，軽質系大黄については本草書中に明確な記載はないが，自然乾燥品であった可能性が大である。加熱処理により虫害を防ぐとともに，瀉下作用を弱めたことが推察される。加熱による薬性の変化については別報で述べる。

4. 中国ではすでに漢代から大黄が瀉下薬としても利用されていたことが医方書である『傷寒論』や『金匱要略』の内容から窺えるが，本草書である『神農本草経』には明確な記載がない。このことは岡西[28]が記しているように，当時は医家と本草家の疎通がほとんど無かったことに起因するものと考えられる。

5. わが国で大黄がもっぱら瀉下薬として利用されてきたのは，中国で金元医学を学び帰国した田代三喜がその知識を曲直瀬道三に伝えた[28]ことに始まるものと推察できる。奈良時代には重質系大黄が輸入されていたにも関わらず，やがて軽質系大黄が賞用されるようになった事実も，わが国では大黄を瀉下薬として評価したことを反映した結果であるといえる。

引用文献

1）a：中華人民共和国衛生部薬典委員会編，『中華人民共和国薬典（1990年版）』，一部，人民衛生出版社，北京，15-16，1990；b：同，1977年版，一部，人民衛生出版社，北京，34-35，1997

2）a：日本公定書協会，『第十二改正日本薬局方解説書』，廣川書店，東京，D・570-576，1991；b：同，『第十改正日本薬局方解説書』，廣川書店，東京，D・544-551，1981

3）神戸中医学研究会編著，『中医臨床のための中薬学』，医歯薬出版，東京，172-174，1993

4）松岡敏郎：大黄の生薬学的研究，生薬学雑誌，**15**，113-148，1961

5）a: J. H. Zwaving: Trennung und Isolierung Anthrachinonglycoside von Rheum palmatum, *Planta Medica*, **13**, 474-484, 1967. b：鶴見介登，林美帆子，米本昭信，藤村　一：大黄の瀉下作用に関する研究，日本薬理学雑誌，**65**，649-656，1969. c: Kyoichi Kobashi, Tadashi Nishimura, Machiko Kusaka, Masao Hattori and Tsuneo Namba: Metabolism of Sennosides by Human Intestinal Bacteria, *Planta Medica*, **40**(3)，226-236，1980

6）播磨章一，松田秀秋，小林由佳，久保道徳：各種大黄の駆瘀血作用と瀉下作用等に関する研究，日本生薬学会第40年会講演要旨集，38，1993

7）Zhi-Cen Lou, Xuan Wang, Masayuki Mikage and Tuneo Namba: Phamacognostical Studies on the Chinese Crude Drug "Da-huang (大黄, Rhubarb)" (I)), Botanical Origin of Official Da-huang, *Shoyakugaku Zasshi* **42**(4)，291-301，1988

8）陶弘景校注，小嶋尚真・森立之ら重輯，『本草経集注』，1853，1972，縮刷影印版，岡西為人訂補・改題，南大阪印刷センター，大阪，朴消：p.22.

消石：p.22. 芒硝：p.23. 沢瀉：p.42. 人参：p.43. 升麻：p.46. 桔梗：p.60. 川芎：p,60. 知母：p.61. 百合：p.69. 大黄：p.76. 蕘花：p.78. 半夏：p.83. 防已：p.83.牡丹：p.83.虻虫：p.108.䗪虫：p.108. 水蛭：p. 109. 桃核仁：p.123. 莧実：p.124
9）唐慎微撰，艾晟校訂，『経史證類大観本草』，1108，1970，廣川書店，東京，279-281
10）劉文泰等撰，『本草品彙精要』，1505，1993，科学書院，東京
11）王圻，王思義編集，『三才圖會』，1609，1988，上海古籍出版社，上海，下冊，2360
12）倪朱謨，『本草彙言』，大成斎蔵版，1645，巻之四図，１丁，巻之五図，１～６丁
13）李中立，『本草原始』，1879，掃葉山房蔵版，巻３，39丁
14）H. Solereder,『Sistematic Anatomy of the Dicotyledons』, Clarendon Press, Oxford, pp. 669-674, 1908; G. E.『Trease, Textbook of Pharmacongnosy』, 8th Ed., Bailliere, Tindall and Cox, London, pp.235-373, 1961；李九丹，張継：市場品大黄の基源調査と品質の考察，薬物分析雑誌，**3**(6)，333-338，1983
15）陳嘉謨，『本草蒙筌』，1565，1988，人民衛生出版社，北京，159-160
16）汪昂庵，『本草備用』，1694，刊行年不明，香港醫林書局，香港，56-57
17）呉儀洛，『本草従新』，1757，1972，杏林書院，ソウル，84
18）黄宮繡纂，『本草求真』，1773，刊行年不明，香港新文書店出版，香港，172
19）難波恒雄，『和漢薬百科図鑑』，〔Ｉ〕，保育社，大阪，16-20，1993
20）江蘇新医学院編，『中薬大辞典』，下冊，上海科学技術出版社，上海，1570-1571，1977
21）張仲景，『傷寒論』，明・趙開美本影印，1968，燎原，東京，142，151，195；張仲景，『金匱要略』，明・兪子木本影印，1968，燎原，東京，111，190
22）吉益東洞，『薬徴』，1828，1980，財団法人漢方医学研究所，東京，145-150
23）王好古撰，『湯液本草』，1246，1987，人民衛生出版社，北京，33-34，95-96
24）朝比奈泰彦編集，『正倉院薬物』，植物文献刊行会，大阪，269-276，1955
25）曲直瀬道三，『薬性能毒』，1669，1975，土と文化社，河内長野市，139-142
26）内藤焦園，『古方薬品考』，1842，1974，燎原，東京，221-225
27）L. Kroeber: Welche Aussichten ergeben sich für den nbau der offizinellen Rhabarberarten in Deutschland, *Sueddeutsche Apothekerzeitung*, **43**, 442, 1921
28）岡西為人，『本草概説』，創元社，大阪，pp.27，371，1977

要旨　漢薬「大黄」は近年ではもっぱら瀉下薬として著名であるが，古くから駆瘀血薬としても利用され，大黄の古来の薬効が駆瘀血であるのか瀉下であるのかについては未だ明確な結論が得られていない。また，近年薬用部位に混乱が見られる。本研究ではこれらの問題点を解決するために古文献をひもといて史的考察を行い，次のような結果を得た。大黄の古来の薬効は駆瘀血であったが，瀉下その他の薬効でも使用されていた。清代までは *Rheum palmatum* を始めとする大型ダイオウ属植物の根茎が良質品大黄として使用されていた。近年，根も使用されるようになったのは，大黄が瀉下薬として評価された結果であると考える。大黄の薬効は多様であり，今後は根茎と根の薬効の相違，瀉下活性以外の効能などについて詳細に検討する必要があろう。

キーワード：大黄，本草考証学，タデ科，薬用部位，薬効

Studies of Rhei Rhizoma (Da-hung ; Daio) —A Herbological Study on Its Medicinal Effects and Medicinal Parts

Masayuki Mikage and Ai Yoshida

Faculty of Pharmaceutical Sciences, Kanazawa University, 13-1, Takaramachi, Kanazawa, Ishikawa 920, Japan

Abstact

Although the crude drug Rhei Rhizoma (Chinese: Da-huang; Japanese: Daio) is now commonly employed as a purgative, some question remains as to whether it was originally used as a depurative (purifying agent; specifically an agent for expelling Stagnated Blood) or purgative in ancient times. There is also some confusion as to the medicinal part of the crude drug being sold on the market. This herbological study was carried out in order to clarify these issues. The results showed that Rhei Rhizoma was originally used mainly as an agent to expel Stagnated Blood, although it was also used for its purgative and other properties. Until the Qing dynasty, the rhizome of the large Rheum species, including *R. palmatum*, was known as the best quality Da-huang. The recent use of the root is thought to be due to recognition of the purgative properties of Da-huang.

Da-huang has many medicinal properties in addition to its usefulness as a purgaive, and there is a need for futher study of these properties as well as the differences between the pharmaco-logical actions of the rhizome and those of the root.